

Anarcha-feminismによるdisability/impairment アプローチの運動論的可能性

生存学研究センター：村上 潔

■ 1 前提と問題提起

◆障害者運動（論）内部における「社会モデル」をめぐる対立

◇disability重視

(Vic Finkelstein, Michael Oliver)

……対社会的な（具体的な要求を実現させる）戦略を重視する立場
×【対立】

◇impairment重視

(Jenny Morris)

……個々の条件の差異を重視するフェミニズムの立場

【本報告の問題意識】

・上記の対立は不可避なものであるのか？ 不可避なものであったとして、別の見方はできないか？ この対立図式に規定されない、具体的に有効な運動とはいかなるものか？

・フェミニズムの複数のタイプそれぞれのdisability/impairmentとの関係性を整理し、課題を明確にする必要がある。

【先行研究の問題点】

・上記の対立図式を止揚【しよう】・相対化することや、責任主体をめぐる議論に収斂【しゅうれん】し、現実の運動として／運動に際して必要な、オルタナティブな道筋を提示しようとしていない。

■ 3 disability/impairmentの綱引き [つなひき] の外で

◇Liberal feminism

・社会モデルが部分的に無効化される（＝個人モデル）
・disabilityは個人の資源によって克服すべきもの
・impairmentは「資質・個性」と位置づけられる
→差異を「活用」する（活用できるかどうかは個人次第）
×【対照的】

◇Socialist feminism

・disabilityに対する政策・制度変更の要求、システム変革が中心課題
・impairmentの問題は前面に出さない
→差異が消去される（差異に対応したケア／フォローは困難となる）

+【オルタナティブ】

◇Anarcha-feminism

・個々のimpairmentを基軸にした支援のオーガナイズ
・disabilityによる不利益には個別闘争（個人モデルではなくコレクティブ〔支援体制〕単位で）で対処
→差異から運動を作る（差異を表明できることが条件となる）

* Liberal feminismと親和性があるように見えるが、現行の資本主義社会と国家体制を前提としていない点で決定的な違いがある。

* 福祉国家的な改良主義は採用しない。よって、disabilityの問題を「社会的に」解決することを目的としない。

◆文献

◇Garland-Thomson, Rosemarie, 2002, "Integrating Disability, Transforming Feminist Theory," *NWSA Journal* 14(3): 1-32.

◇Hewitt-White, Caitlin, 2004, "Notes towards an (anarchist? feminist?) critique of (anarchism? feminism?)," http://auto_sol.tao.ca/node/view/50

◇Roseneil, Sasha ed., 2013, *Beyond Citizenship?: Feminism and the Transformation of Belonging*, London: Palgrave Macmillan.

◇柴田啓文（しばた・ひろふみ）, 2003, 「障害者運動とフェミニズムとの出会い——「障害の社会モデル」をめぐる」『四日市大学論集』15(2): 111-125.

◇Tateiwa, Shinya, 2011, "On 'the Social Model'," *Ars Vivendi Journal* 1: 32-51 (<http://www.ritsumeit-arsvi.org/contents/read/id/27>)

■ 2 論点の再考——フェミニズムの多様性（どのフェミニズムか？）

◇Liberal feminism

……機会の平等／能力主義による条件向上【獲得型】

◇Socialist feminism

……統一的な制度改良／社会的な空間設定【要求型】

・主に想定される「フェミニズム」の主体は上記2つとなる。
・前者は現行の資本主義社会・国家体制に親和性が高く、後者は低い。

・後者は、ドラスティックな社会変革を志向しつつ、同時に、現行のシステムを福祉国家よりに修正していく（現状に対応した改良主義的な）方向性をもつ。

・上記2つは基本的に対立する。

・これに加えて主体に加えたいものが1つある。

↓

◇Anarcha-feminism

……当事者直接闘争／自主的・自律的な空間運営【構築型】

* Anarcha-feminism = Anarchist feminism :
直接行動主義 / 自主管理主義 / 非ヒエラルキー構造 / 草の根的 (grass-roots) / コレクティブ単位の運営 / フレキシブルなネットワーク / マイノリティ尊重 / 個性の促進 / 協働 [きょうどう] の促進

■ 4 Anarcha-feminismのアプローチ／方向性の可能性と限界

◆Liberal feminism×Socialist feminismという「対立」の外にある選択肢としての存在意義

——オルタナティブとして（それらの問題点を批判する立場として）機能する。

【可能性】

・trans/queerの存在にもっとも親和性が高い

→既存の「女性」障害者運動の枠を拡張する

・impairment/disabilityそれぞれを（所与のものとして、画一的に捉えず）個別具体的・自律的に定義し、共有する。そこから運動と支援空間・共有空間を構築する（運動方針から個を規定しない）。

・身体（+労働）の自律的管理という前提がもっとも強固である。

・日常的な「Safer space」の構築・運営の技術が活かされる。

【限界】

・直接行動に当事者が参加すること（アクセス）の困難性

・インフラ (infrastructure) へのアクセスの問題

——地域差（都市部以外における生活の困難）

・人的資源（の多寡 [たか] ・強弱）に依存する

——国家規模での一律の対策にはつながらない

■ 5 展望

・国家規模・政権の性格を問わないグローバルな運動拠点の設定は可能である。

——が、そのために理念と方法論を広範に共有することが課題となる。

・労働運動・反セクシズム運動との相互補完が想定される。

——が、そのためには既存の運動の意識変革も必要となる。

★以上の論点から、Anarcha-feminismによるimpairment/disabilityへのアプローチは、1)既存の障害者運動、2)「社会モデル」議論、3)

「フェミニスト障害学」への批判的な存在基盤として有効であり、必要

だと思われる。実践事例の集積と、その共有の推進が当面の課題となる。